

動き出した歯学部桜

今年は例年より早く4月1日に歯学部桜が開花しました。この桜は歯学部駐車場の市役所に面した角に植えられており、ちょうど幹線道路の真正面にあり、新潟市で一番早く開花する桜として長年市民に親しまれてきました。筆者も国内や海外での講演の際、オープニングのスライドとして満開のこの桜を必ず映し、新潟一有名な桜と自慢して参りました。

ところが、4月2日国土交通省新潟国道事務所は「新潟大学歯学部前サクラ今年で見納め」との記者発表を行い、新聞にも大きく掲載され、インターネット上にも発表され*、いずれ国道拡張に伴う伐採かと覚悟をしていたものの大きく波紋を呼びました。満開の際には、市民の皆様が最後の見納めとして記念写真を撮っておられる姿があちこちに見られました。また、筆者も写真を撮りに出たところ、桜に会いに来た何人もの本学卒業生にお会いし、昔の話に花を咲かせました。幸いなことに、市役所側の4本については伐採ではなく、移植することとなり、現在根回しを行って養生中

であります。

歯学部ニュース編集委員会では、本学のマスコットの存在でもあり、シンボルでもあった桜の移転は本学関係者の関心事の一つであるにとらえ、今号の特集として取り上げることとしました。

歯学部の桜、移転の経緯

新潟大学旭町キャンパス横を通っている国道116号線は交通量が多く、特に歯学部脇の学校町付近は大きく市役所を迂回しているため線形も悪く、渋滞の発生、交通事故の多発など多くの問題を抱えていました。このため、建設省（当時）は昭和63年、市役所前より学校町通2番町間のミニバイパスの事業化を開始し、平成元年度には市役所前100メートルが完成しました。その後学校町の用地買収、ビルやマンションの取り壊し等が行われ、歯学部の周りの見通しが良くなって来るのを見て、工事開始もいよいよとの感を強めてきました。

こうした案は歯学部創設以前よりあったようですが、具体化したのは市役所移転に伴う都市計画整備案からで昭和60年10月3日の新潟日報に掲載されています。ここでは道路の北半分は歯学部駐車場に侵入しています。これに対して大学側では市に対して撤回を求め協議を行ったようですが詳細は不明です。

その後カーブを緩やかにした変更案が提案され、建設会館、北越マンション等が用地に掛かることになりました。この変更で歯学部側としては、旧官舎のあった部分は残ることとなりましたが逆に附属病院南側の駐車場が広くえぐられることとなりました。この案が昭和63年6月21日に都市計画決定され、昭和63年度事業決定されています。

この案はそのまま建設省に引き継がれ、現在に至っています。ただ北越マンションが分譲マンションであったため用地買収に手間取り平成10年完



平成16年4月3日 新潟日報

* 新潟国道事務所のホームページ
<http://www.2159.go.jp/>
 右欄中ごろ 記者発表を見てください。

成予定が今日に至っているものです。また、本学としては駐車施設の確保、騒音・振動・防塵対策ならびに樹木の保存について要望を出していました。

いよいよ用地買収も終盤になり、平成14年に新たに具体的対応が求められ、現在旭町地区構内駐車場対策ワーキンググループにより対策を検討中です。いずれにせよ、歯学部駐車場の売却は目前に迫り、歯学部の桜もこのままでは伐採の危機に直面していました。

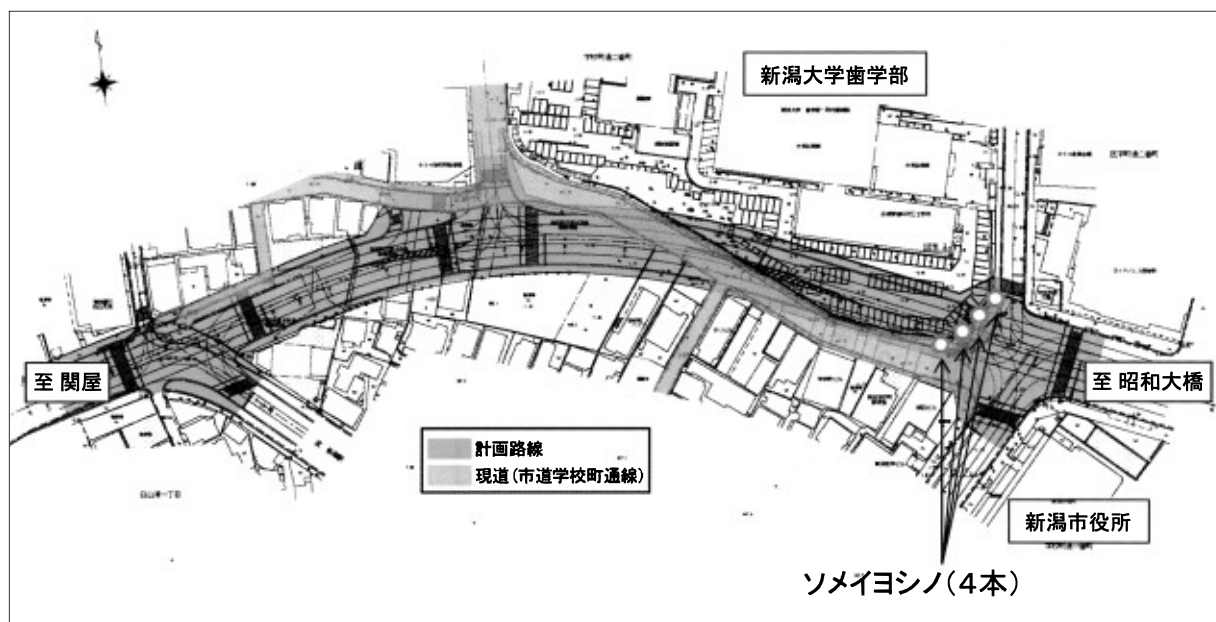
国土交通省では本学の桜保存の要望に応え、急遽市役所前の4本の桜について樹木医の診断を得て保存に踏み切ることとなり、7月中には根回しを行い現在養生中です。来年初めには、しかるべき場所を求めて移植を行うことになっています。

残念ながら用地上のその他の桜や松の木は伐採されることになりましたが、こうした経緯で市民に親しまれた桜が一部でも残されることは喜びに耐えられません。

肝心の移植先は未定とのことですが、116号線ミニバイパスの図面を見ますと、旧官舎前の現道路部分がポケットパークとして残るようですから、おそらくここに植えられるのではないかと想像しています。ここなら現在地と同様に日当たりもよく、道路からもよく見え、ますます歯学部の桜の名を高めてくれるものと期待しています。

歯学部の桜はいつ植えられた

さて、本題の桜ですがいったいつ植えられたものでしょう。新潟日報の記事にもインターネッ



歯学部付近の国道116号線ミニバイパス計画



根回し作業



引越しを告げる看板

トにもその辺はよくわからないと書かれています。いろんな方に聞いてみましたが皆さん覚えが無いそうです。筆者には歯学部向かい側で生まれ育った友人がいますが、彼に聞いてみてもわからないといいます。現歯学部の校舎が建っている土地は、以前は医学部のグラウンドで、グラウンドの周りにポプラが植えられている写真を見せられました。歯学部がプレハブの校舎から待望の新校舎(現校舎)に移ったのが昭和48年(1973年)6月のことです。この時のことを思い出してもグラウンド周りは工事で何もなかったような気がします。その後駐車場周りを整備してツツジや桜を植えたような気がします。せっかく植えた植木が何本か抜かれてしまったのに、県庁(現市役所)前だけは交番が向かいにあったので残ったという笑い話もあります。おそらくこのころ植えたものでしょう。

ということでいろいろ調べていたところ、決定的な記事を歯学部創立25年記念誌にを見つけました。昭和50年(1975年)の項に「歯学部の創立10周年を記念して、5月31日午前9時から、校舎南側の校庭に50余名の教職員、学生が参集して記念植樹が行われた。学部長、病院長の鍬入れによって、ソメイヨシノ、ショウジョウノムラ(モミジ)が植えられた。その後数日間にわたり、校庭を巡って140本の植樹を行い、新校舎に景観を添えた。」

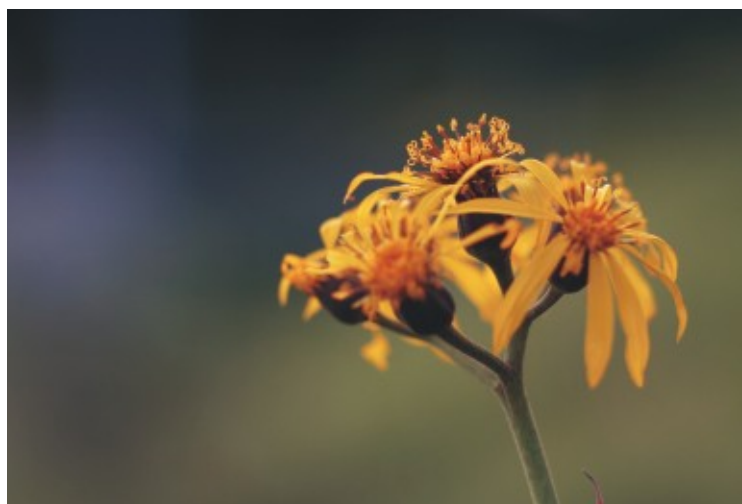


歯学部創立10周年記念植樹
(昭和50年5月31日)

とあります。間違いなく昭和50年に植えられたもので29年前ということになります。ずいぶん大きな木に育ったものですね。

歯学部のマスコットである桜が道路拡張で伐採の危機にありましたが、新たな場所を求めて植栽されることになりました。今後ますます元気に満開の花を咲かせ、市民の皆様にも長く親しまれますようお願いするにはおれません。

(文責 子田 晃一)





歯学部の桜

新潟大学名誉教授 堀井 欣一

5月の中頃友人から「歯学部のシンボルの桜の移動が始まりましたね、どこに移すのですか？」と尋ねられた。道路拡張の為によいよ歯学部駐車場削減工事が始まったものと思い、歯学部の側を通った際桜の木を眺めたら、数本の桜の根元が掘り起こされていた。その後治療のため歯学部病院を訪れる機会があって、歯学部駐車場でこの工事の作業員に聞いてみたところ、植え換えのための工事であるが移転先は分からないとの事であった。また桜の木のみで、松の木の移動の指示はないとの説明であった。

新潟大学歯学部が昭和40年に創設されてから約40年、創設当時から数年間、医学部の旧木造建物利用やプレハブ建物の校舎、病院であった。当時、全国的な「学園紛争」が盛んな時期であったため、歯学部固有の建物建築位置については、転々とし、五十嵐地区、西大畑地区、旭町地区、医学部キャンパス内など紆余曲折あり、ようやく現在の位置（当時の医学部グラウンド）に決まったのは昭和46年（1971年）であった。

借り物、プレハブではなく、歯学部及び付属病院固有の建物が完成したのは昭和48年（3月竣工、6月移転）であった。この時すでに、国の道路計画により、旧医学部グラウンドは学校町道路拡張のため削られる事が決まっていたとのことだった。

以来、キャンパスの環境整備が行われていたが、

学校町通り側の桜は以前からあったのかどうか記憶が確かではない。現在の学部講堂と学校町通の間に大きな松がたくさんあり大学職員宿舎もあったこと、歯学部病院の入り口の門のあたりに太い背の高いポプラが2本並んでいた事は鮮明に覚えている。

旭町キャンパス内には桜の木がたくさんあるが、現市役所の斜め向いにある歯学部駐車場の桜が春になると新潟市内のどこの桜よりも早く咲く事で有名で、市の名物の1つでもあった。

歯学部キャンパスが道路建設のため削減されるとはいえ、30年以上前から市民に親しまれてきた桜並木が消えてしまうことは何とも寂しいことである。

しかし、伐採されずに移植されるとのことは幸である。保存学の子田先生のお話では、「旭町キャンパス内のどこかに植え換えられのではないかと考えられるが、歯学部、付属病院の近くを望みたい」とのこと。これからも市民の目を楽しませてもらえる場所に移植される事を願っている。

それはそうと、プレハブの旧歯学部付属病院の側にも、またプレハブ研究棟の間にも桜の木があり、初夏になると小さな黒いサクランボを付けていたことを思い出した。あの桜の木はどうなったのだろうか？



年々歳々花相似 歳々年々人不同

5期生・倉敷市開業 近藤修六

桜ほど日本人の心に深く溶け込んでいる花はありません。

「ひさかたの 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花の散るらむ」 紀 友則

「願はくは 花のしたにて春死なん

そのきさらぎの望月の頃」 西行法師

これらの歌は桜の花と、その心を詠んでいます
が、私は桜と言えば先ず思い浮かべるのが入学式
です。

昭和44年（1969）新潟の満開の桜が私を迎えて
くれるはずでした。しかし、当時は学園紛争が全
国の大学に吹き荒れ、東大、東京教育大（現筑波
大）、東京外大の入学試験が中止となり、あわてて
志望校を第二希望に変更しました。それでも歯学
部の競争率13.6倍（実質は10倍強）。そして、晴れ
での入学式を楽しみにしていると大学から校舎封
鎖のため入学式1ヶ月延期の通知。1ヶ月遅れの

入学式に参加すると、待っていたのは旧医学部
のお古校舎。歯学部の建物は無く、階段式の文化的
建造物の教室での入学式。小林学部長が祝辞を読
んでいると、突然1期・2期生の先輩が会場に乱
入して（4名程、今どうしてるかな）、中止の憂き
目に遭いました。当然私達を迎えてくれるはずだ
った桜とは無縁の波乱な入学式でした。

学園紛争のその後は、ご承知のように赤軍派、
浅間山荘事件、よど号事件へと変遷。

教養の2年間は、おかげでほとんど部活と遊び
に明け暮れた感じです。当時西大畑キャンパスの
桜、脳研入り口の桜は印象に残っています。

当時は、旭町グラウンドが医学部付属病院の前に
あり、その一部にテニスコートが2面あり、部活
でよく利用していました。グラウンドでは歯学部体
育祭が行われました。しかし、当時グラウンドに桜
があったかどうかは記憶にありません。その後、
体育祭、納涼祭は西大畑キャンパスに移動しまし
た（写真）。

さて、時は流れ6年経過しました。その旭町グ
ラウンドには歯学部と付属病院がありました。

写真は卒業記念に建設会館の屋上から私が撮影
したものです（写真）。しかし、桜の木は写ってい



西大畑での納涼祭です。右より 佐藤泰則
君（防衛医大教授）、高野吉郎君（東京医科
歯科大教授）、細田裕康名誉教授、私。



新築当時の歯学部（昭和50年ころ）。向かいの建設会
館屋上から撮影。

いませんし、まだ無かったのでは？

当時の歯科界は非常に活気に溢れ、新聞が歯科医療機関の不足、患者の待機問題を盛んに取り上げ社会問題化していました。卒業式の式典が県民会館で全学部卒業生一同参加のもと行われましたが、北村四郎学長が「医療分野を志すものは、目先の金銭にとらわれることなく医療人としての理念を高く持て」という内容の祝辞があったのを覚えています。

その後4年間、第一補綴学教室（石岡教授）に在籍しましたが、その頃桜が植えられたそうですが、いつどこで誰が植えたのか記憶にありません。まして、桜が咲いていたかは…。

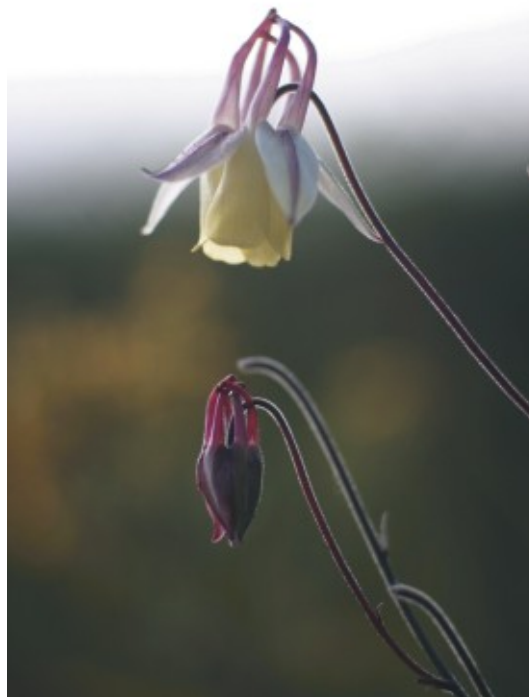
更に時は流れ、平成16年現在の歯科界はいかがでしょうか。先人の将来を見る目が無かったのか、時の流れに流されたのか、厚生労働省の恣意的力に屈したのかは分かりませんが、年々同じ問題が議論され一向に解決に解決されていません。それど

ころか我々歯科界を取り巻く環境は益々悪化しています。そして歯科界の上層部は、今回大きな失策を犯しました。

刻舟求剣、時代を読み、臨機応変の判断が求められる今日です。その意味で、新しく創設された口腔生命福祉学科は、これから更に需要の拡大する介護分野に眼を向けたものであり、賞賛し期待するものです。

岡山県北部に醍醐桜という有名な一本の老木があります。後醍醐天皇が隠岐島に流される途中にこの地に立ち寄り、あまりの桜の美しさに感動し、この木の下でお休みになられたといわれています。七百年以上経った今日でも村人に大切に守られ、愛されています。大河ドラマ宮本武蔵のシーンにも出ましたが、毎年同じ桜を咲かせ、様々な人々を、時代を見続けています。

そんな木が歯学部の敷地内にあっても良いのではないのでしょうか？





思い出の桜木

新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻
顎顔面再建学講座
新潟大学歯学部附属歯科技工士学校（兼任）

渡 邊 清 志

「歯学部」の桜の伐採・一部移植に伴う特集への原稿を依頼された。その理由が、「歯科技工士学校は最も近くでいつも見てきた桜木だから…」とのことだったので、そういう立場からならと、ある程度納得し思い付くままに書いてみることにした。

本校は、残念ながら平成17年3月をもって閉校となり、29年間歩んできた歯科技工士教育に幕を引くこととなった。本校は昭和51年4月に設置されたが、現在の場所に移転したのは第7期生を入学学生として迎えた昭和57年の春である。以来、昨年4月の最後の入学学生である第28期生（現在在学中の2年生）まで、常に新入生を暖かく迎え、そして彼らの成長を静かに見守り続けてきてくれたのが、新潟大学歯学部のシンボリック的存在である「桜木」である。本校の卒業式・入学式の祝辞にも、必ず表現された「桜木」である。

この「桜木」が今年度を最後に姿を消すことと

なった。20余年の間、本校の成長を見守り続けてきてくれた「桜木」でもあるわけで、本校の閉校と共に姿を消すのも、何かの縁を感じずにはいられない。今後は、毎年のように撮した新入生との記念写真は、なつかしい思い出となるのであろう。

「桜木」の一部は、移植されるとのことで、心から喜んでいる。ただ、枝はほとんど切り落とされ、現在のように優雅な花を咲かせ、その堂々とした姿を維持する状態での移植は不可能であろう…。

しかし、生命ある限り、永い年月が経てば、春を迎えるたびに、現在のような満々とした枝を有し、満開の花を咲かせ、通り行く人々の目を楽しませ、心を和ませてくれる存在になることを信じている。

そのような新たな人々に親しまれる存在となる場所に移植してほしいと祈っている。

